

入選

当たり前にあるものの大切さ

茨城大学教育学部附属中学校

二年 丸山 咲 千

「水って、本当に大切だね。」ある日、家族とそんな話をしたことがある。普段の生活では、蛇口をひねればきれいな水が出てくるのが当たり前で、特に意識することはなかった。のどがかわけばすぐに飲めるし、料理にもお風呂にも自由に使える。私はそんな便利さを疑いもせず、毎日を過ごしていた。しかし、ある話を聞いたことをきっかけに、その「当たり前」がどれほど大切なものなのかを深く考えるようになった。

それは、昔お母さんが経験した災害での断水の話だ。突然水が出なくなり、家の中は一気に不便になったという。飲み水はペットボトルに頼るしかなく、料理に使う水も限られていた。家族は米を炊く

にも苦勞し、少しの水を大切に使いながら食事を作っていたそうだ。さらに、トイレも自由に使えず、生活のあらゆる場面で困ることが増えたと聞いた。私はその話を聞いて、「水がないだけで、こんなにも生活が変わってしまうのか」と驚いた。普段は気にも留めていなかった水のありがたさが、急に重く感じた。

お母さんは断水中、何度も「水が出ればいいのに」と思ったという。しかし、その願いはすぐにはかなわず、時間がかかったという。蛇口をひねっても何も出ない現実を前に、水がある生活がどれほど恵まれていたのかを、実感したそうだ。水はただの透明な液体ではなく、私たちの生活を支える大切な存在なのだと、私はその話から強く感じた。

この話を聞いて、私は「当たり前にあるものほど、その価値を忘れやすい」ということに気づいた。普段の生活では、水がどれだけ使われているかを意識することもないし、意識したこともない。けれど、飲むこと、食べること、体を洗うこと、トイレを使うこと。どれも水があるからこそ成り立っている。

もし水がなかったら、私たちの生活は一瞬で不自由になってしまう。だからこそ、水は「当たり前にあるもの」ではなく、「守っていくべき大切なもの」なのだと、思うようになった。

それ以来、私は水をむだにしないように心がけている。歯みがきのときや顔を洗うときに蛇口をしめたり、シャワーの時間を短くしたり、食器を洗うときに水を流しっぱなしにしないようにしたり、小さなことでもできることを続けている。

また、学校の授業で世界には安全な水を使えない人がたくさんいることを知り、私の考えはさらに深まった。日本では蛇口をひねればきれいな水が出るが、それは世界では当たり前ではない。水を手に入れるために長い距離を歩く人や、汚れた水しか使えない人もいる。そうした現実を知ると、自分がどれだけ恵まれた環境にいるのかを改めて感じた。

お母さんの話と学習を通して、私は「当たり前にあるものの大切さ」を強く意識するようになった。水は限りある資源であり、むだにしてはいけない。私たち一人ひとりが少しずつ意識を変えることで、

未来の水を守ることにつながるはずだ。だからこそ、私はこれからも水を大切に使い、当り前のありがたさを忘れずに生活していきたい。